

Esaki, T.- Notes on Amblypygi found in Palau.

裏南洋パラオより獲られたる Amblypygi

理學博士 江 崎 悅 三*

九州帝國大學農學部昆蟲學教室

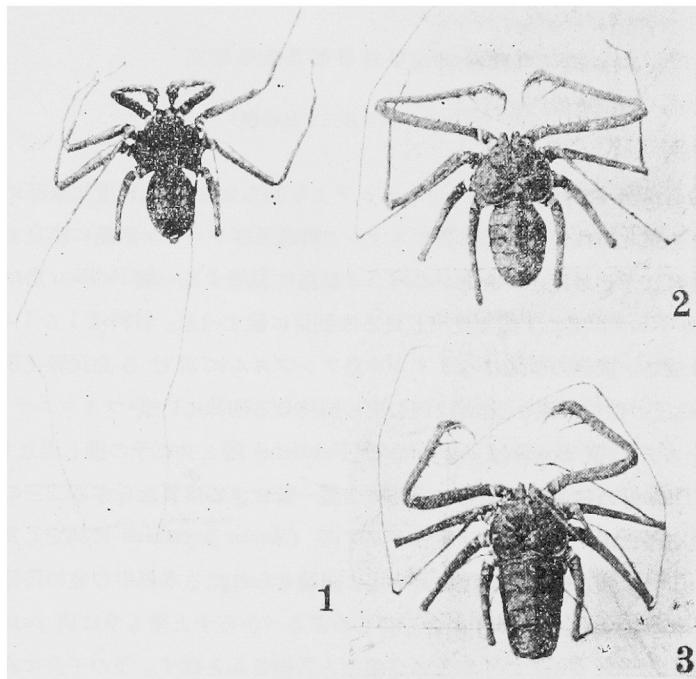
(昭和十一年六月三十日受領)

Amblypygi の仲間は從來ミクロネシアより知らるるなし。印度馬來區に弘布すれども東北方は僅かに比律賓ビスマルク群島及びソロモン群島に棲息するのみ。されば予が最近西カロリンのパラオ群島に隸屬する一嶼 Peliliou 島に於て *Charon Karsch* 屬の 1 種を見出したるは刮目に値すべし。材料は 1 ♂ 1 ♀ 1 幼蜘蛛より成る。成體の 2 頭はペリリオウ島アシアスルに於ける島民教化學校長 R. Chō 氏の採集に係り、幼者は同じ地の腐朽せる樹幹に白蟻・フトマルヤスデ・タマヤスデ・蠍 *Liocheles australasiae* Fabricius 等と共に予の獲し處なり。先覺 Thorell の極めて詳細なる記載に全然一致せざる重要ならざる二三の點を認むれど予は本例を假りにニューギニア産 *Charon papuanus* に同定したり。Kraepelin に據る時は此の種は當時迄に記載せられたる本屬中の他の種類と共に *Charon grayi* (Gervais) に合一せしめざるべからずと雖も予は尙 *papuanus* を以て *Charon grayi* の小形なる島嶼型と看做さんと欲す。予の手許に在る♀は直徑 10 耗の卵嚢を擔へり。而して一卵の直徑は 2.5 耗を算す。

* Das Vorkommen der Amblypygi auf den Palau-Inseln. Von Teiso Esaki の邦譯。原著は *Lansania* Vol. VIII, No. 75 に掲出の豫定にして其の別刷は今年中に創立會員に配布す。本稿は便宜上幹事の一人の譯出せしものにて譯文の不當は原著者の全く關知せざる處とす。〔譯者〕

Charon grayi papuanus Thorell.

- 1888 *Charon Papuanus* Thorell, Annali del Museo Civico di Storia Naturale di Genova, ser. 2, vol. 6, p. 345-349.
 1899 *Charon Grayi* Kraepelin (partim), Tierreich, Scorpiones und Pedipalpi, p. 247, 248.



Charon grayi papuanus Thorell の
幼, $\times 3$ (Fig 1); 成♂, $\times 1$ (Fig 2); 成♀, $\times 1$ (Fig 3)

1 ♂ 並びに 1 ♀ 西カロリン・パラオ群島・ペリオウ島にて R. Chô 氏採。

1 幼 同島にて1936年3月6日江崎悌三採。

標品の體部測定値下の如し。

體 長	背甲:長	幅	
♂ 20.5耗	7耗	11耗	
♀ 23耗	7耗	10.5耗	
幼 6.3耗	2.5耗	3.5耗	
鋸 角:腿節 脂節	觸枝:腿節	膝節と脛節との合長	跗 節
♂ 14.5耗 15耗	18耗	35.5耗	折 捩
♀ 11.4耗 12耗	18耗	35.5耗	約42耗
幼 2.7耗 2.1耗	4.5耗	9耗	10耗

擱筆に際し予は校長 R. Chô 氏に衷心よりの謝意を表明せんとす。

Uyemura, T.- Nest-making by *Lityphantes cavernicola*.

ツリガトグモの住居製作

植 村 利 夫

東 東 市!瀧野川區西ヶ原町三一〇

〔昭和十一年六月九日受領〕

昭和十一年六月三日、予は農學士仲辻耕治氏より、九州で採集したツリガネグモ *Lityphantes cavernicola* Boesenberg et Strand の生きた成♀一頭を貰ひ受けたので、早速飼育して其の興味ある住居製作を観察する事にした。小さな土塊をくつ付けて鐘状の巣を作る事は、書物で読み又聞いても居たので、先づ庭の稍硬い土を細かく碎いて飼育器の中に入れ、網を張らしめる爲に小さな樹枝を其の中に立てゝ置いた。少し空腹の様だつたから直ちに蚊と蠅を捕へて